

日本人と韓国人の化粧観の国際比較研究 男女学生のアンケート調査から

大阪樟蔭女子大学被服学科*、大阪大学大学院人間科学研究科**、韓国韓端大学校美容学科***

村澤博人*、大坊郁夫**、趙鏞珍***

The purpose and background of research

We know that Japanese people and a South Korean have similar features and a heterogeneity about beauty, such as makeup and cosmetic surgery. In this research, the questionnaire was carried out for the Japan-South Korea man-and-woman college student for the purpose of showing the difference between Japanese and South Koreans in concept of makeup and beauty

The contents of investigation come out to their behavior of an everyday makeup, a fragrance, cosmetic surgery, cosmetic service, service of esthetics and beauty therapy, image of color of skin, processing of body-hair and body-smell, concept of beauty, concept of body-and-mind, the youth, the marriage partner, an attractive men and women and ordinary life.

In analysis, we did statistics processing of the data. Factor analysis were also performed and the difference in Japan and South Korea was clarified.

Result and consideration

The subject was 416 Japanese college students and 475 South Korean college students. It consists of 198 Japanese men, 218 Japanese women, 123 Korean men, 352 Korean women.

A Japanese women students was doing makeup very much about daily life compared with the South Korean women students and the Japanese of 37% sufficiently applied the mascara. It was shown clearly that Japanese woman student did makeup when dating than usually and when dressing up than when dating.

The result that 67% of Japanese women dislike their body hair and 86% of Japanese women is characteristic and seems that they prefer no odorization so to speak, and a tendency which is completely different from a male also with a South Korean woman was shown. The tendency not to like the body can be considered as the different situation in Japanese society or the men-women relations.

By the scent of the cosmetics currently used, the tendency for Japan-South Korea man and woman to be reverse to the present condition and an opinion was seen. It thinks as a future taste.

In spite of being this registered questionnaire, the South Korean 8% woman and 1% men has answered that they underwent an operation on their face by cosmetic surgery. Japanese men and women were 0% to it. This difference shows cosmetic surgery has not acquired citizenship yet in Japan, I think.

About cosmetic surgery, Japanese students's answer rate was lower than those who answered the South Korean students and we learnt South Korean's opinion more clearly that South Korean students of 50% agreed with the cosmetic surgery and their 50% felt insecurity in the safety of the cosmetic surgery. It has been understood that pros and cons exist though it tends to be talked that the cosmetic surgery is active in South Korea in the mass media.

We were able to find a part of the difference of the opinion between the make-up and beauty in Japan-South Korea. We want to discuss basic sense of values while individually digging it down in the future.

1 緒言

日本人がどのような美の価値観の下に化粧をおこなってきたのかというような化粧観、あるいは化粧する以前の顔やからだについての基本的な価値観を意味する顔観やからだ観についてはあまり研究がおこなわれてこなかった。ましてや諸外国、特に顔立ちが似ている東アジアにおける現代人の化粧観の国際比較などにはほとんど目が向けられなかったと言えよう。

筆者は日本人の化粧文化研究の一環として顔の美意識についての研究をしてきたなかで欧米との比較をおこない、日本の顔文化の特徴として「顔隠し文化」「正面顔文化」を指摘した¹⁾。このような特徴、とくに横顔に対する意識の違い（日本人は正面から平面的に顔をとらえがちで、横顔を美としてこなかった）について、美術解剖学、人類学などの従来の学問分野の研究者から、顔の形態的な違い、すなわち日本人は平面的な顔立ちだから横顔がなくて当然という指摘をされたことがある。

この点については筆者ら²⁾は1991年より日韓、1997年より日韓中の美貌観研究（ポーラ文化研究所）に着手し、日本人は顔を正面から平面的に見る傾向があるなど、顔の見方について韓中とは異なる価値観の存在を指摘し、その違いは歴史的文化的背景に帰因することを示唆してきた。

そこで、本研究では化粧そのものを研究対象として、まず、調査対象を両国の男女大学生に絞り、日本人と韓国人



Research of Japanese and Korean concept of beauty in their makeup and appearance
From the questionnaire survey of the man and woman student in Japan-South Korea
Hiroto Murasawa

Department of Clothing Sciences of Art,
Osaka Shoin Women's University

の化粧や顔からだについての美意識の違いを明確にするために、アンケート調査を実施した。本研究報告では、主たる結果を報告する。

2 アンケート調査

2-1 調査目的

日韓男女大学生を対象として、記入式と選択式を併用したアンケート調査を通して日本人と韓国人の化粧観、顔観の違いを探る。

2-2 調査方法

化粧観、顔観に関連する調査項目を作成して、選択式、あるいは自由記述（記入）式にて回答を得、その回答を比較分析してその違いを探る。

具体的な内容は、ふだんのメイクアップの実態とその程度、流行の取り入れ方、化粧美容関連の手入れの実態、美容整形などを含む、美容化粧関係の経験の実態、エステの利用と目的、美肌感、体毛観、体臭観、フレグランスの利用、肌色観、染毛実態、美貌観、美容整形の経験、若さと基準、外見と内面・結婚相手・魅力的な異性同性・人並みなどに対する意識、となる。

実査は、日韓の男女大学生を対象に、アンケート用紙を配布してその場で記入してもらい、回答する方式を採った。分析にあたっては単純集計、および因子分析などの多変量解析も行う。

調査対象は日本の男女大学生と韓国の男女大学生で、各国男女各 200 名を目標とした。

3 調査結と考察

3-1 調査対象者

人数：日本人大学生（男 198 名、女性 218 名） 関西大学、天理大学、日本大学芸術学部
 韓国人大学生（男 123 名、女性 352 名） 漢瑞、仁川、ベッソック、韓端、忠南、明知、各大学校

年齢：日本男子（18 - 25 歳）平均 19.49 歳、日本女子（18 - 29 歳）平均 20.17 歳
 韓国男子（17 - 27 歳）平均 21.07 歳、韓国女子（18 - 29 歳）平均 20.47 歳

3-2 結果と考察

3.2.1 日韓女子学生の TPO 別によるメイク度の違い

Fig. 1 は「ふだん」「異性とのデート

時」「パーティなどのドレスアップした時」の 3 つの TPO 別に、どんな化粧をしているのか、10 の選択肢から選んでもらい、さらにそれぞれのメイクの程度（以下メイク度）を「しっかりやっている」「ふつう」「していない」の 3 段階で回答してもらった日本の女性の結果である。

a) 日本の女子学生の「ふだん」のメイク Fig. 1 の上の横棒グラフで「しっかりメイク」+「ふつうのメイク」=「メイクしている」人は「ベースメイク」で 83%、「眉」で 81%、「ヘアカラー」で 80%、「マスカラ」で 79%であった。

「しっかりメイク」だけを見ると、「マスカラ」が 37% と一番高く、「ベースメイク」が 29%、「眉」24%、「ヘアカラー」21%となる。

つぎに「デート時」を見ると、「メイクしている」人は全体的に増え、「ドレスアップ」においてはさらに増える傾向にある。

この増え方を「しっかりメイク」と「ふつうのメイク」を対比させて見たのが Fig. 2 である。

「ふだん」のメイクでは、「マスカラ」が「ふつう」と「しっかり」との差がたいへん少ないことを除くと、ほとんどのメイクで「しっかり」が「ふだん」の半分以下である。

「デート」となると、「ベースメイク」で「しっかり」と「ふだん」が同率になり、「マスカラ」では「しっかり」が「ふだん」の倍以上の回答となった。

さらに「ドレスアップ」したときを見ると、「ふつう」と「しっかり」の違いにおいて「マスカラ」は 3 倍近く「しっかり」が増え、「ベースメイク」でも「ふつう」の 1.5 倍増えた回答を得た。「アイライン」「アイライナー」「リップカラー」「ネイルカラー」「眉」については、「ふだん」と「しっかり」の差が同等あるいはほぼ近い支持となった。

流行との関連を見ると、ここ数年の若い女性のマスカラを中心としたアイメイクの流行がこの調査結果からはっきりと確認することができた。特にドレスアップしたと

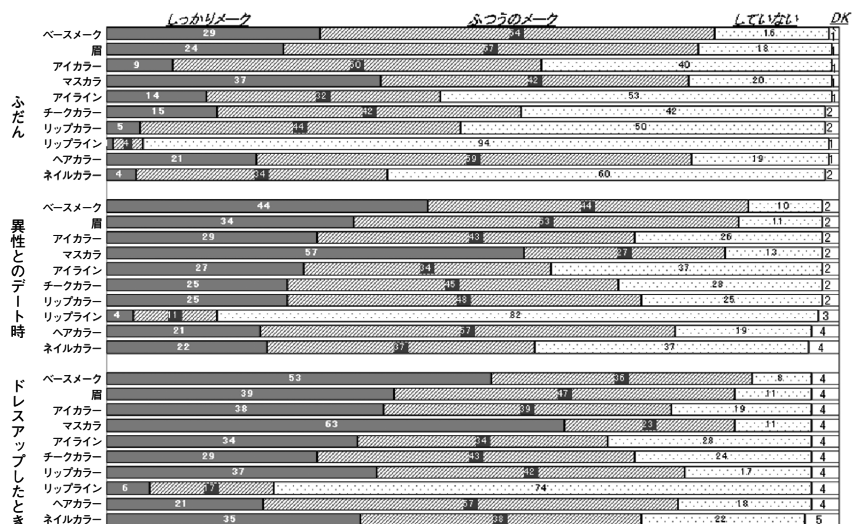


Fig. 1 日本人女子学生の TPO 別化粧度

きの「マスカラでしっかりメイクする」人は63%とほぼ3人に2人おり、長い睫毛が美しいとする流行を示しているといえよう。

韓国の女子学生の結果はFig. 3である。全体を見ると、DK、すなわち無解答が多かった。これは韓国の学生は基本的にあまりメイクをしていないので、回答を飛ばしてしまったと判断できる。したがってここでは「していない」と同じ意味として扱うことにした。

「ふだん」のメイクで「しっかりメイク」+「ふつうのメイク」=「メイクしている」人は「ベースメイク」で70%と一番高く、次は「眉」で46%、「リップカラー」で41%、「マスカラ」で33%であった。

この「メイクしている」人の「ふだん」と「デート」「ドレスアップ」での変化を見ると、日本人の女子学生に比べて著しい変化は見られない。

つぎに「しっかりメイク」だけを見ると、「ふだん」のメイクでは「ベースメイク」が24%と一番高く、「眉」が15%と下がり、他は10%にも満たなかった。日本の女子学生に比べると、全体に低い。しかし、高くても20%に満たないが、「アイライナー」「マスカラ」「アイライン」「リップカラー」は「デート」「ドレスアップ」の順に高くなる傾向が見られた。

さらに「しっかりメイク」と「ふつうのメイク」を対比させてみると(Fig. 3)「ふだん」と「デート」「ドレスアップ」での変化のなかで、日本の女子学生のように、「しっかりメイク」している人が「ふつうのメイク」している人の率を超えることはなかった。

このように、韓国の女子学生と日本の女子学生とははっきり異なる化粧傾向が存在するという結果であった。まとめると次のようにある。

1. 大きな違いは、「メイクしてい

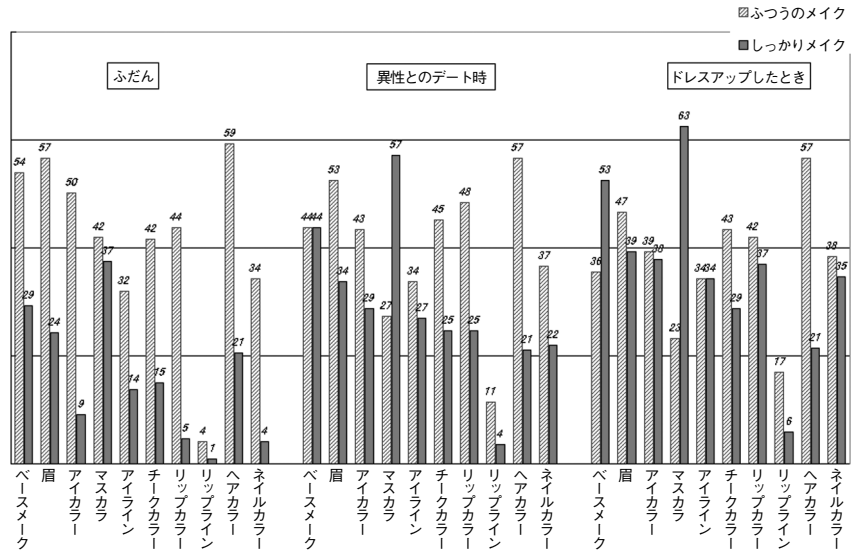


Fig. 2 日本女子学生のTPO別化粧率

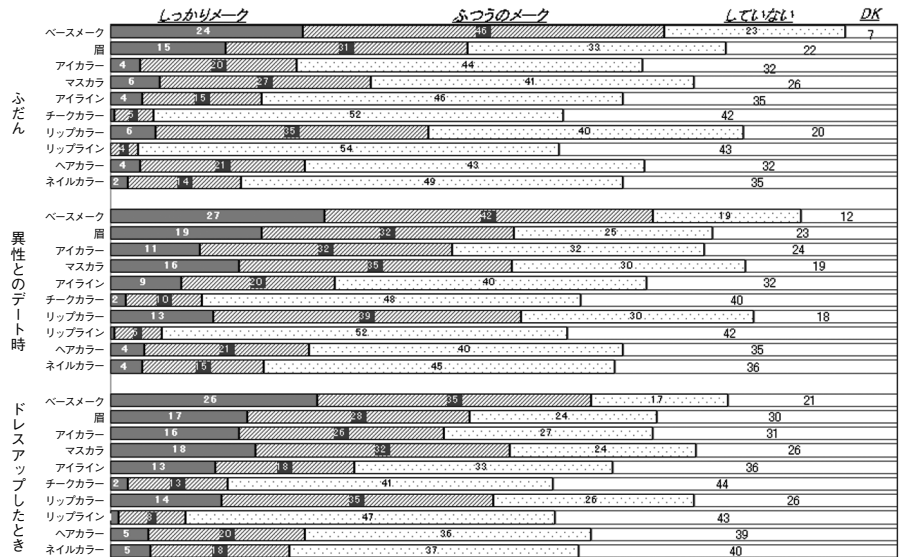


Fig. 3 韓国女子学生のTPO別化粧率

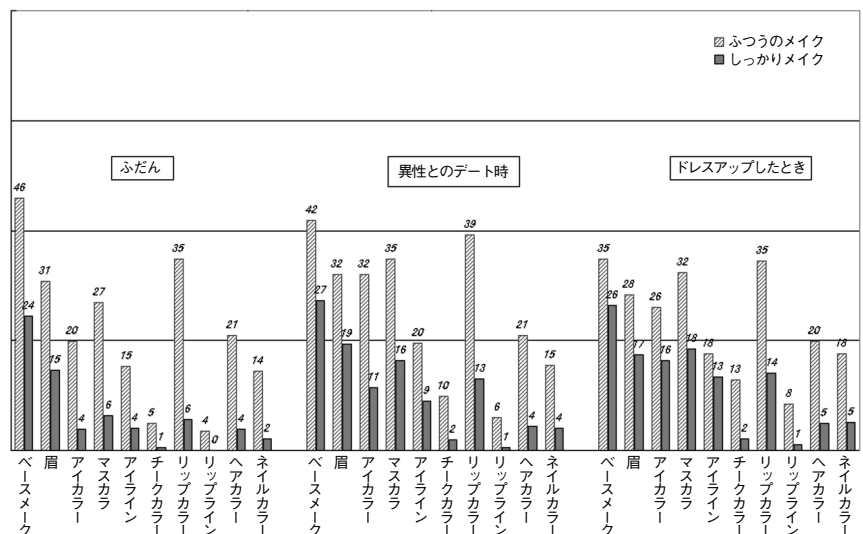


Fig. 4 韓国女子学生のTPO別化粧率

る」女性の比率である。「ふだん」「デート」「ドレスアップ」のそれぞれの場合において、日本の女子学生のメイク率は、韓国の女子学生に比べて高い結果であった。

2. ヘアカラーは毎日染め直すことができないので除くが、日本の女子学生は「ふだん」より「デート」「ドレスアップ」の順に「しっかりメイク」する傾向にある。言い換えると、アイメイクを中心にネイルカラーに至るまで、TPOに応じてメイクを変えていることを意味する。いわばフルメイク志向の日本の女子学生であり、おしゃれ意識は高いと言うことはできよう。

それに比して、韓国の女子学生は「ベースメイク」「眉」のように「デート」「ドレスアップ」の時も「ふだん」も変えない部分をもちつつ、目や唇や爪などのポイントメイクではしっかりとメイクする人も少数がいる。

このように、学生を対象にしたアンケート調査では日本と韓国ではメイク度の違いは大きく存在するという結果であった。今後、日本と同様に、学生レベルでの化粧人口が増えるであろうし、さらにはメイクの低年齢化が起きるだろうが、どう変化するのか、装うことの文化に関心をもつものとして大きな関心事である。そのためには、メイクだけでなく、人のもつ美的感覚をも含めた視点で見っていく必要がある。

3.2.2 ふだんの手入れの日韓学生の比較

Fig. 5, 6はふだん肌の手入れとしておこなっていることについて、「垢すり」「サウナ」「顔パック」「鼻パック」「産毛剃り」「顔剃り」「ひげ剃り」「脱毛」と分けて質問した結果である。

日本の女子学生は「脱毛」「産毛剃り」「顔剃り」がほぼ半数の回答を得て、「鼻パック」が約1/3で続くのに対して、韓国女子学生は「垢すり」「顔パック」がほぼ半数、「サウナ」が1/4であった。傾向としては日韓で逆である。

日本の男子学生はヒゲが9割近く、顔剃りが2割強であったのに対して、韓国の男子学生は「ひげ剃り」「顔剃り」が半数以上の回答を得たほか、「垢すり」や「サウナ」が20%の回答を得ており、女子学生同様、「垢すり」や「サウナ」が高いことがわかる。

3.2.3 肌をきれいにするために

肌をきれいにするために何をしているかを聞いた結果はFig.7である。

日本の女子学生の特徴を見ると、多い順に「化粧品で肌の手入れをよくする」(79%)「睡眠をよく取る」(51%)「肌によい食べ物を食べる」(45%)である。韓国の女子学生の特徴は「化粧品で肌の手入れをよくする」(57%)「睡眠をよく取る」(56%)「垢すり・風呂・温泉に行く」(53%)の三大要素に加えて「自家製パックなどを利用する」(31%)

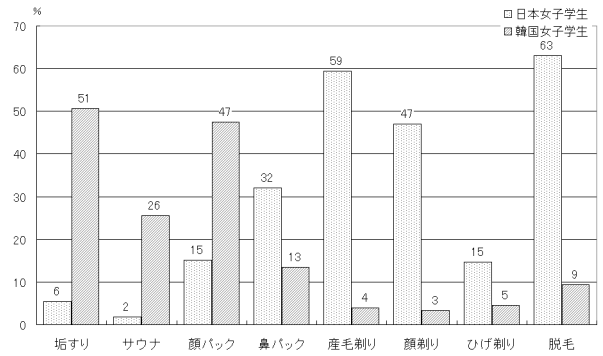


Fig. 5 ふだんの手入れの日韓女子学生の比較

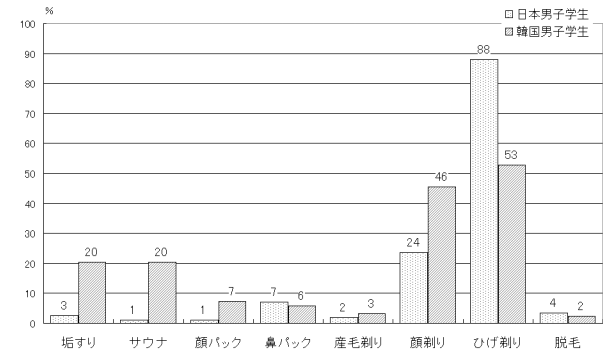


Fig. 6 ふだんの手入れの日韓男子学生の比較

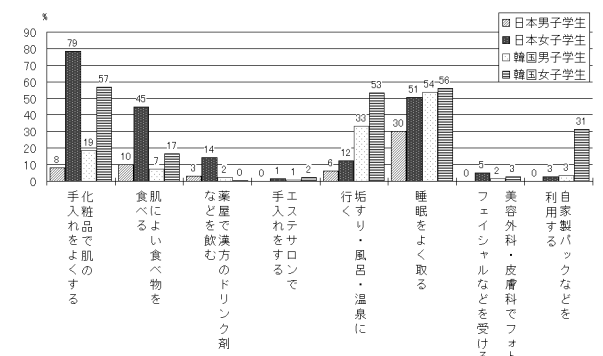


Fig. 7 肌をきれいにするために

となる。自家製パックは主にきゅうりを搾り下ろし、小麦粉と混ぜて顔にのぼして使うパックで、韓国の家庭で一般的に用いられ、肌をしっとりさせるといわれている。

日本の女子学生は化粧品好きで食べ物にこだわり派に対して、韓国の女子学生は垢すりパック派であろうか。

日本の男子学生の回答は「睡眠をよく取る」(30%)、韓国の男子学生は「睡眠をよく取る」(54%)「垢すり・風呂・温泉に行く」(33%)で、男子学生はどちらも特徴を述べるまでに至らない結果であった。

3.2.4 ピアス・美容整形などの経験

広く美に関連する経験を「ピアス」「タトゥー」「美容整形」「歯列矯正」「ダイエット・食事指導」「メイクサービス」

「エステ（美顔）」「エステ（全身美容）」「垢すり」「カラー
アドバイス」「デザイナーによるヘアカット」「トータルフ
ァッションアドバイス」の13項目に渡って回答してもら
った結果が Fig. 8 である。

ピアスは日本人が多かった。トップは日本の女子学生で
51%、続いて日本の男子学生で20%、韓国の女子学生は
11%、韓国の男子学生は8%であった。かつて言われた「儒
教の国」だからからだを傷つけることは好まないという理
由はもはや両国に通じないように見えるが、美容整形につ
いては後述する「美容整形への意見」でさらに議論をして
いる。

タトゥーは日本の女子学生で2%、日本の男子学生で1
%、韓国の女子学生は1%、韓国の男子学生は1%であ
った。日本では昨今、ミュージシャンを含めてからだに入れ
る人が目立つために一部では流行しているといわれ、専門
誌もいくつも出てはいるが、このような調査で数値として
上がってくるほど高いのであろうか。今回、質問項目とし
てただ「タトゥー」としたが、日韓共に「眉に入れるパー
マメントメイク」としてタトゥーがおこなわれる場合があ
り、この調査では区別していなかったため、このデータが
入り込んだ可能性が高い。したがって、ここでは眉に入れ
るタトゥーも含んだ結果として判断した。

その結果、眉に入れたタトゥーと眉以外のタトゥーとの
区別が困難であるためにこれ以上の考察は避けたい。

美容整形は、記名式のアンケートであるにもかかわらず、
韓国の女子学生は8%。韓国の男子学生で1%が経験あり、
日本人は男女共0%であった。韓国人の結果はかなり現実
を反映しているのに対して、日本は美容整形が市民権が得
られていないために、現実を反映していないようにも考え
られる。さらには記名式であったことが日本人にとっては
回答しにくかったことも考えられよう。

逆に前述のピアスについては、市民権が得られているた
めに日本人の回答は現実が反映されており、韓国に比べて
多かったと考えられる。後述する「美容整形への意見」で
理解を深めたい。

歯列矯正は日本の女子学生で19%、日本の男子学生で
11%、韓国の女子学生は10%、韓国の男子学生は6%
であった。日本の学生の治療経験は5人から10人に1人
の割合で、韓国の学生より高いが、だからといって日本人
の方が全面的に歯並びがよいかという決してそうは言え
ないだろう。NHKのハンゲル講座（2003）で日本人の特
徴を述べる韓国人の台詞に「体毛が濃くて歯並びがわる
い」とあるほど、日本人の歯並びの悪さは既知の事実のよ
うに思える。昨今の韓流ブームで韓国の俳優をテレビで
見る機会が増えたが、韓国人の歯並びに対する意識、すな
わち、徹底して整えるという美意識は日本人以上のもので
あろう。

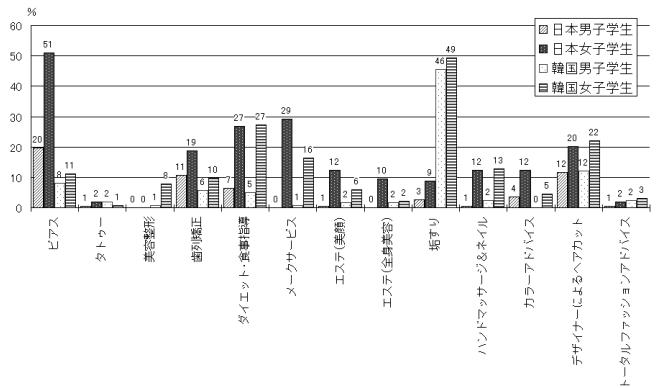


Fig. 8 美容・サービス関係の経験

ダイエット・食事指導などの経験者は日本の女子学生で
28%、男子大生で6%、韓国の女子学生で27%、男子大
生で5%で、日韓とも女子大生に多い結果であった。両国
とも「見られる対象としての女性」という意味であろうか。

メイクサービスも両国とも女性に高い回答があった。日
本の女子学生で30%、韓国の女子学生で16%であった。
エステも同様、両国とも女性に高く、日本の女子学生で顔
で12%、全身で10%、韓国の女子学生で6%、全身で2
%であった。メイクサービス、エステともに日本の女子学
生が高かったが、メイクサービスは有料が話題にはなっ
ているが多くの場合、無料サービスであるのに対して、エ
ステはPRのためのサービスを除くと有料と考えられる。経
済的に余裕がないと受けられないサービスであろう。

垢すりはもともと韓国の習慣であるために韓国男女が高
く、約50%であった。日本人は10%に至らなかった。

ハンドマッサージ&ネイルケアも女性に多かった。日本
の女子学生で12%、韓国の女子学生で13%であった。

デザイナーカットは日本の女子学生で20%、韓国の女
子学生で22%、日本の男子学生で12%、韓国の男子学
生は12%であった。両国共に専門家の意見を生かしたヘア
カットが浸透しつつあるということであろう。

カラーアドバイスは日本の女子学生で12%、日本の男
子学生で4%韓国の女子学生で5%、韓国の男子学生は0
%であった。

トータルファッションアドバイスは全体に低く、サービ
スを受けても経済的な余裕がないと実現できないことであ
るためか、両国ともまだそのようなサービスを受けるには
至っていないようである。

3.2.5 体毛観・体臭観の比較

日本では1980年代後半以降、清潔志向が高まり、体臭
や体毛に対して否定的な評価が支持されて毛深いとエステ
に通ったり脱毛する若い男性が増えている。

3.2.5.1 体毛について

自覚レベルの回答であるが、「自分の体毛について」の

回答を有意差検定をおこなうと、0.01%で日韓で有意差が認められた。体毛は韓国の学生は日本の学生よりも体毛は濃くないようである。また、前述の「ハングル講座」での日本人の特徴表現として「体毛が濃くて菌並びがわるい」とあるから、韓国人の方が体毛が薄いと認識していると考えても差し支えないであろう。

「自分の体毛についての意見」を求めた結果が Fig.10 である。日韓で有意差 (p=0.01%) が認められるが、それ以上に両国とも男女で差が明確である。女子学生で嫌う傾向が認められ、特に日本の女子学生の67%が「嫌い」と回答した点は特徴的であるといえる。日韓共に伝統的には女性は見られる対象であったが、日本の女子学生の回答は著しい特徴である。日本人は韓国人に比べて体毛が濃いといわれているが、体毛の濃さのみの結果ではないだろう、再度体臭のところで議論する。

つぎに「あなたの友達や恋人の体毛」についてどう思うのかを聞いてみると (Fig.10)、自分の体毛を最も嫌う日本の女子学生は男性が「濃くてもよい」が20%と一番多く、「濃いのが嫌い」が一番少なかった。自分の体毛の濃さを否定しながらも異性友達や恋人の濃さは許容する意味は相手により好まれたいという常に周りとの関係をよい状態におこうとする意識の自己像の現れであろうか。日本社会における若い女性のあり方、男女関係をも含めて考察する必要がありそうである。

体毛の最後に産毛についての意見は聞いている。韓国人はもともと体毛が薄いということから3/4の学生が気にならないと答えている。韓国人に比べて日本人は日本の女子学生の「気になるので」抜いたり剃っている回答は特徴的である。アジア大陸では多くの民族で産毛を含めた体毛の処理に糸を使う文化があるのに対して、日本では剃刀を使って処理する文化という違いはあるが、産毛や体毛をむだな毛、不必要なものとする日本人の文化の特徴であろうか。日本の女子学生の回答は体毛で記したことを感じる。

3・2・5・2 体臭観の比較

自分の体臭については、日韓での有意的な差は認められなかったが、男女においては日韓共に認められた。全体としては「弱い」も含め、半数以上の学生が自分の体臭の存在を認識しているという結果であった。その一方、「わからない」人が2割前後いた。

自分の体臭に対する意見においても日韓の違いのみならず、日本の女子学生の結果が目立つ。すなわち、日本の女子学生の67%が体毛を嫌い、86%が無臭化を好んでいることである。このことから、日本の女子学生は自分を体毛もなく体臭もない存在になりたがっていると読み取ることができよう。

村澤は「現代人の体毛観」(村澤 1988)、「現代人の体

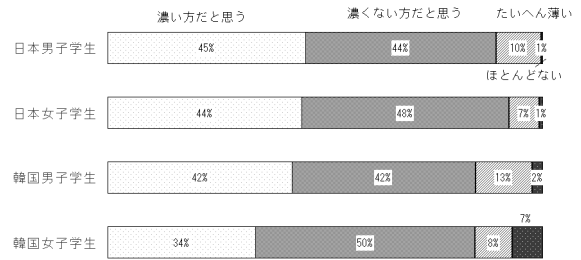


Fig. 9 自分の体毛について

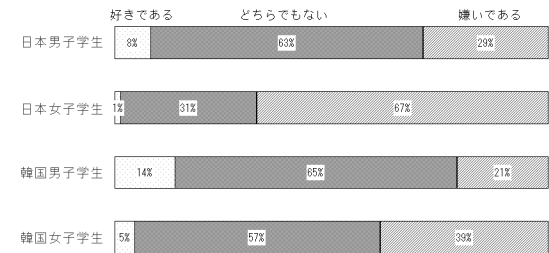


Fig.10 自分の体毛についてのあなたの意見

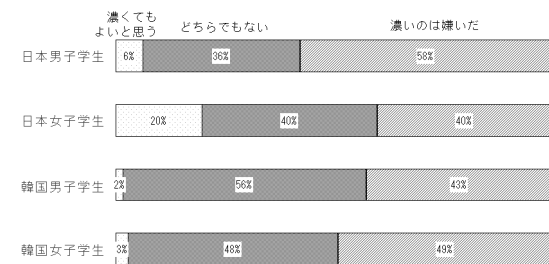


Fig.11 あなたの異性の友達(恋人)の体毛について

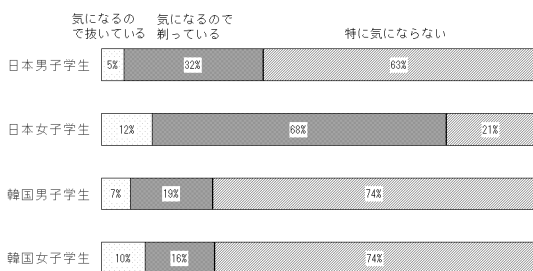


Fig.12 顔の産毛についてのあなたの意見

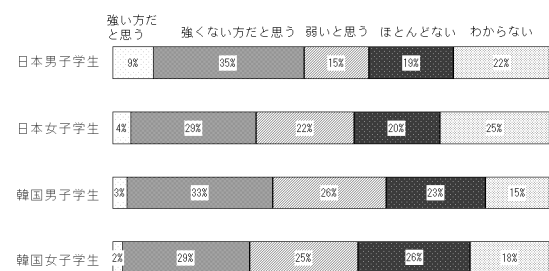


Fig.13 あなたの体臭は

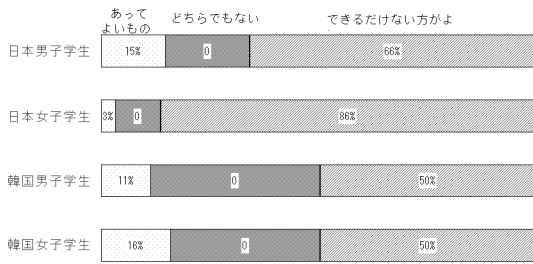


Fig.14 自分の体臭についてのあなたの意見は

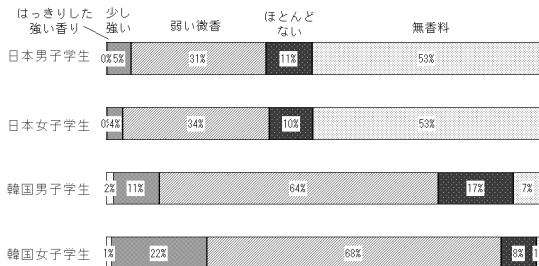


Fig.15 あなたが使う化粧品、ヘアケア剤、洗剤などの香りは

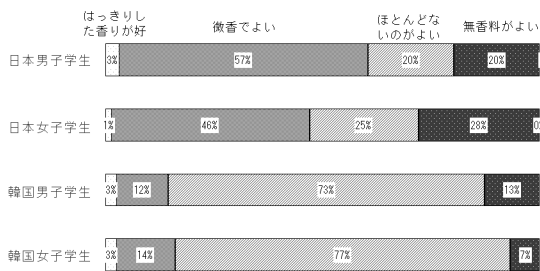


Fig.16 あなたが使う化粧品などの香りについての意見は

臭観」(村澤 1989)で無毛(脱毛)化、無臭化について述べ、匂いを出す身体、毛が生える身体を無化する傾向について指摘したが、現在でも同じ傾向が見られるということになる。この傾向は男性とは異なる彼女たちの置かれている日本の社会状況を暗示しているようにも思える。

3・2・5・3 化粧品などの香り

自分で使っている化粧品などの香りについて聞いたのが Fig.15 である。日韓ではっきりとした違いが見られ、日本の学生は無香料、微香が主に対して、韓国の学生は微香を含む、香りがあるものを男子学生で76%、女子学生では91%、使用していた。日韓で対照的な結果である。

Fig.16 は化粧品の香りについての意見の結果を示している。日本の男女学生は「微香がよい」がトップで半数近くを占め、「無香料」はほぼ半減し、現状を必ずしも肯定していない結果であった。韓国の男女学生も「ほとんどないのがよい」がほぼ3/4を占め、現状と逆転した結果であった。現状と意見の食い違いは興味深い、今後の嗜好を示す結果として考えることができるであろう。

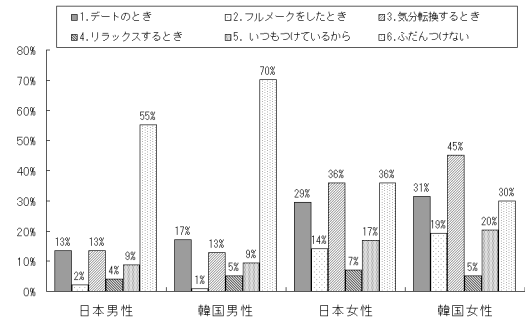


Fig.17 あなたはフレグランスをどのようなときに使いますか

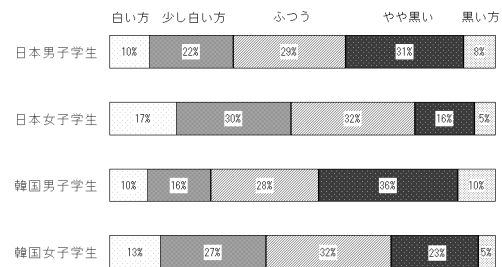


Fig.18 あなたの肌色は

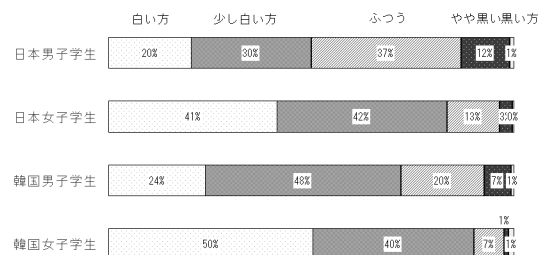


Fig.19 あなたの肌の色の好みは

さらに、フレグランス類の使用状況を聞いたのが Fig.17 である。両国とも男女で差があり、「ふだんつかわない」のは韓国の男子学生で70%、日本の男子学生が50%であった。使用するときで一番多かったのは、女性においては「気分転換するとき」が一番多く、「デートのとき」が続く。常時使用は両国とも男性で10%弱、女性で20%ほどであった。

3・2・5・4 肌色

肌色に関する認識と好みを見たのが Fig.18、Fig.19 である。認識としては、日韓とも男子学生は黒い方とっており、女性では白い方と答えている回答が多かった(日本、韓国とも男女間では有意差あり。日本で $p=0.19\%$ 、韓国では $p=0.05\%$)。

一方、自分の肌色の好みについては、男子学生よりも女子学生が、日本人よりも韓国人の方がより白い肌色を好む傾向が見られた。

日韓の比較では日本人の方が白く思っている傾向にある(有意確率 $p=14.1\%$) が、好みに関しては、韓国人の方が白い方を好む傾向があった。

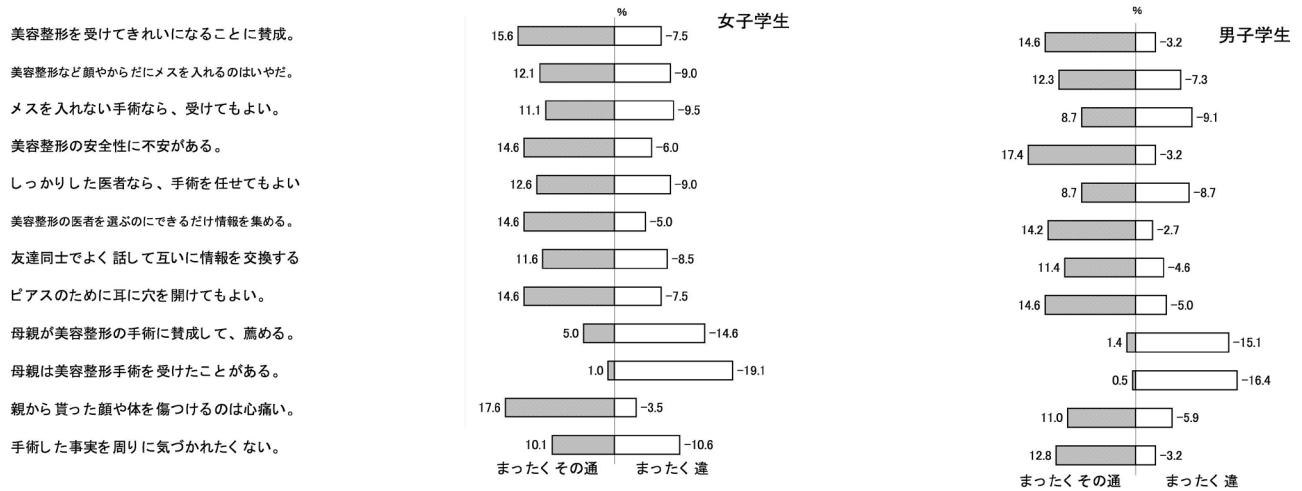


Fig.20 美容整形などについての意見—日本

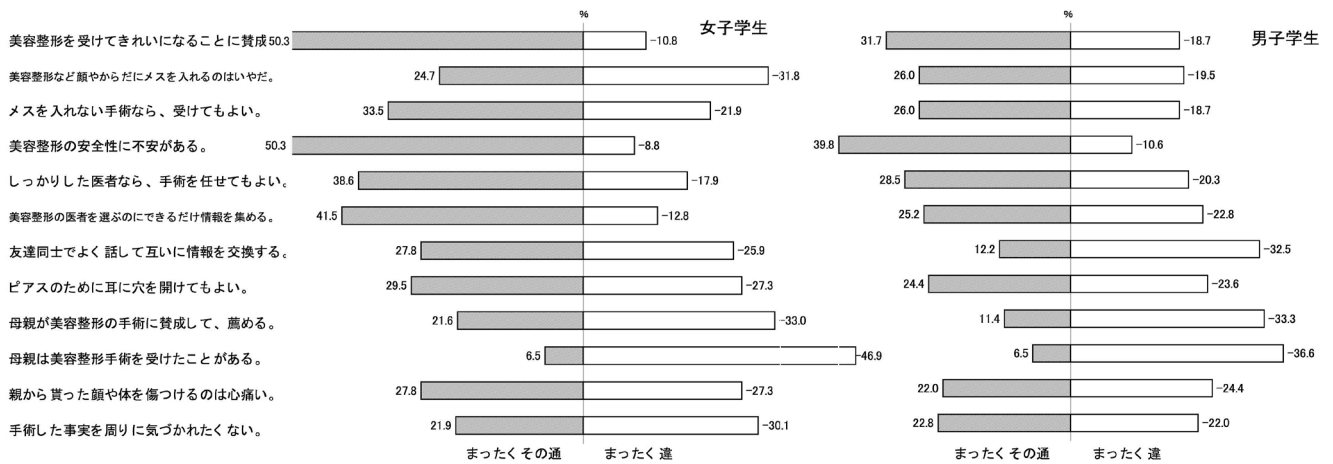


Fig.21 美容整形などについての意見—韓国

3・2・6 美容整形などの意見

Fig.20、Fig.21 は美容整形に関する 12 の意見について「まったくその通り」「まったく違う」の選択（無解答あり）をしてもらった結果である。以下のその特徴をまとめると、

1. 日本の学生は賛否合わせて最大でも 23% の回答で残りの 8 割近くが回答していないため、美容整形に対する意見は不鮮明になりがちである。それに対して、韓国の学生は最大で 62% 最低で 43% の幅で、日本の学生と比べると鮮明な回答である。そこで、多くの場合、当事者に当たり、回答率が高い韓国の女子学生の特徴から見てみた。
2. 韓国の女子学生は、美容整形そのものに対して 50% が「賛成」、同じく 50% が「安全性に不安がある」とも答えている。「2. 美容整形など顔やからだにメスを入れる」ことに対しては、32% がよいと肯定する一方、否定は 25%、「11. 親から貰った顔や体を傷つけるのは心痛い」と思う人は 28%、反対は 27% と、賛否が拮抗している。この傾向は「8. ピアスのために耳に穴を開けてもよい」の回答にも賛成 30%、反対 27% と現れている。

「不安」を解消するために、「6. 美容整形医を選ぶのにできるだけ情報を集め」（42%）て、「7. 友達同士でよく話して互いに情報交換」（28%）して、結果として「5. しっかりした医者なら手術を任せてもよい」（39%）と考えている。

日本でいうプチ整形に当たる「3. メスを入れない手術なら受けてもよい」とする人は 34%、プチ整形に反対する人は 22% いた。母親の影響を見てみると、「9. 母親が美容整形の手術に賛成して薦める」で賛成 22%、反対 33%、「10. 母親は美容整形手術を受けたことがある」かどうかはその通りが 7%、そうでないとする人が 47% いた。韓国の女子学生で美容整形の手術を受けた人が 8% であったが、この程度の数値として経験者は出てくるのであろうか。後述のように日本では 1% であったことを考えると、反対意見はしっかりありながらも美容整形を受ける人もそれなりにいるという韓国が見えてきそうである。

美容整形したことに対しては、「12. 手術した事実を周

りに気づかれたくない」と思う人は22%、知られてもよいとする人は30%と気にしない女子学生が多かった。このデータにも、一般にテレビなどで紹介されている韓国の美容事情だけでなく側面、「気づかれたくない」と考えている韓国の女子学生の存在を感じざるを得ない。賛否両論がしっかりある社会のように見える。

3. 日本の女子学生は回答率が低いため、傾向が読みにくい。美容整形そのものに対して17%が「賛成」、反対に「安全性に不安がある」は15%いる。「2.美容整形など顔やからだにメスを入れる」ことに対しては、11%がよいと肯定する一方、否定は10%、「11.親から貰った顔や体を傷つけるのは痛い」と思う人は18%、反対は4%となり、美容整形に否定的な学生の意見はぼんやりとどが見えてくるが、肯定派は「顔や体を傷つけるのは痛い」とは思わないが4%出会ったように明確に意見が出ていないようである。「8.ピアスのために耳に穴を開けてもよい」という意見は日本では市民権が得られたのか賛成15%、反対8%であった。

「不安」を解消するために、「6.美容整形医を選ぶのにできるだけ情報を集め」(15%)で、「7.友達同士でよく話して互いに情報交換」(12%)して、結果として「5.しっかりした医者なら手術を任せてもよい」(13%)となるが、回答率の低さが解釈を不鮮明にしていることは否めない。

プチ整形に当たる「3.メスを入れない手術なら受けてもよい」とする人は11%、プチ整形に反対する人は10%いた。母親の影響を見てみると、「9.母親が美容整形の手術に賛成して薦める」で賛成5%、反対15%、「10.母親は美容整形手術を受けたことがある」かどうかはその通りが1%、そうでないとする人が20%いた。

美容整形したことに対しては、「12.手術した事実を周りに気づかれたくない」と思う人は10%、知られてもよいとする人は11%とほぼ同率であった。

いずれのデータもすでに述べたように日本の学生の回答率が20%前後と低いため、明確な傾向を指摘することは困難さを伴うと考える。

4. 男子学生に関してはほとんどの場合まだ当事者でないため、ここでは省略することとする。

3・2・7 外見を中心にした生活観についての意見

外見を中心に内面、年齢、結婚、魅力、髪型など広く生活に関する考え方について40項目の質問を用意し、各項目について「まったくそう思う」「ややそう思う」「ややそう思わない」「まったくそう思わない」の4段階で回答してもらい、因子分析(主因子法、varimax回転)してその構造を表にしたのがTable 1(注:表中、因子の順番は重要順で因子次元の高低を示したものではない)である。

全体を見ると、日韓、男女でかなり似通った構造があり、日韓の男子学生で6因子、日本の女子学生で5因子、韓国の女子学生で4因子あることがわかった。

日韓男女で共通する因子として、「結婚に、お金のあるなしは重要な問題である」「人生を成功させるためにはお金は必要だ」というような「お金指向を意味する因子」、「年上の女性と結婚してもよいと思う」で代表される「年上女房指向を意味する因子」、「できるなら、20代で結婚して家庭をつくりたい」「結婚するなら30歳前である」という「早婚指向を意味する因子」がみられた。

「結婚するなら美しい(ハンサムな)異性がよい」とか「人生を成功させるためには美貌は必要だ」というような「美貌指向を意味する因子」は日本の女子学生を除いて、「顔をきれいしていることはその人の内面をもきれいにしていることに通じる」「いい加減なメイクをしている人はいい加減な内面をもっていると思う」などで代表される「外顕=内面指向を意味する因子」は韓国の女子学生を除いて、ほかで共通して存在した。

そのほか、「友達なら美容整形や自分たちの顔かたちについても具体的に意見を言いあう」「男性が化粧してもいいと思う」という「おしゃれ指向」が日韓の男子学生に存在した。

以上のように、外見を中心とした生活観についての分析結果からは、日韓男女とも類似した因子構造をもっていることがわかった。

日韓の生活観の違いを見いだすために設計したつもりであったが、結果的には明確なものを出てこなかった。言葉の表現の問題を含め、再検討する必要がある。

Table 1 外見を中心とした生活観についての因子構造のまとめ

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
韓国の男子学生	美貌指向 お金指向	年上女房指向	早婚指向	おしゃれ指向	外見=内面指向	若さ指向
韓国の女子学生	美貌指向	年上女房指向	お金指向	早婚指向		
日本の男子学生	美貌指向	外見=内面指向	年上女房指向	お金指向	おしゃれ指向	早婚指向
日本の女子学生	外見=内面指向	お金指向	年上女房指向	魅力指向	早婚指向	

(主因子法、varimax回転)

4 総括

今回の日韓の学生への調査を通して、しっかり流行の化粧をしている日本の女子学生、体臭や体毛について特異な結果を示した日本の女子学生、美容整形に対してはっきり回答し、かつ賛否両論の存在が見えた韓国の女子学生、広く生活観を扱った調査では因子構造的には類似した傾向をもつ日韓の学生、などを知ることができた。目論みながら諸事情で実現できなかったこともあるが、これをきっかけにさらにテーマを絞った調査研究を実施して広く化粧文化に関する見方を拡げていく所存である。その結果、日本人と韓国人の化粧観や顔やからだの美に対する価値観の同質性や異質性について理解が深まると同時に、日本人らしさ、延いては日本人とはという大きなテーマに化粧文化研究というアプローチから一歩でも近づくことができれば幸甚である。

感謝

本アンケート調査において、韓国語への翻訳と実査で韓国明知大学校教授の崔京國先生にはたいへんお世話になりました。また、韓国語学校学生（在ソウル：当時）の齊藤尋美さんにはアンケート調査設計時からインタビュー調査、「時代別ファッションの傾向とメイクアップ」の翻訳でたいへん尽力いただきました。ここに感謝申し上げます。

(参考資料)

- 1) 『美人進化論』（東京書籍 1987）、『顔の文化誌』（東京書籍 1992）
- 2) 大坊郁夫・北星学園大学教授（現大阪大学大学院教授・心理学）、趙鏞珍・韓国ソウル教育大学校教授（現韓端大学校美容学科教授・美術解剖学）、李当岐・北京清華大学美術學院教授（美術解剖学）、との共同研究で、1991年より日韓、1997年より日韓中の美貌観研究（ポラ文化研究所）を開始。
大坊郁夫・村澤博人・趙鏞珍 1993 魅力的な顔と美的感情—日本と韓国における女性の顔の美意識の比較—感情心理学研究 第1巻第2号
最近では、村澤博人・大坊郁夫・趙鏞珍・李当岐 2001 男性顔の魅力認知についての韓日中の比較（1）— 調査方法と基本属性の検討— 韓日美術解剖学シンポジウム予稿集
大坊郁夫・村澤博人・趙鏞珍・李当岐 2001 男性顔の魅力認知についての韓日中の比較（2）— 魅力認知はどのくらい一致するのか— 韓日美術解剖学シンポジウム予稿集
- 3) 「身体のパリティクス—日本美容外科手術を中心に—」（川添裕子 2000 千葉大学大学院社会文化化学研究科都市研究専攻博士論文 日韓比較も含まれている）
- 4) 韓国の大手の化粧品会社の太平洋が発行した『時代ファッションの傾向とメイクアップ』（CD-ROM 版 2004年 12月現在未公開資料 齊藤尋美訳）